

於  
198  
3

賴豪阿爾梨性鼠傳卷之三

東都曲亭主人著述

門人魁蕃癡叟批評

もろ

第六套

血刀を撃つ唐糸為久の説  
雙言家ノ事々義婦大娘を慰

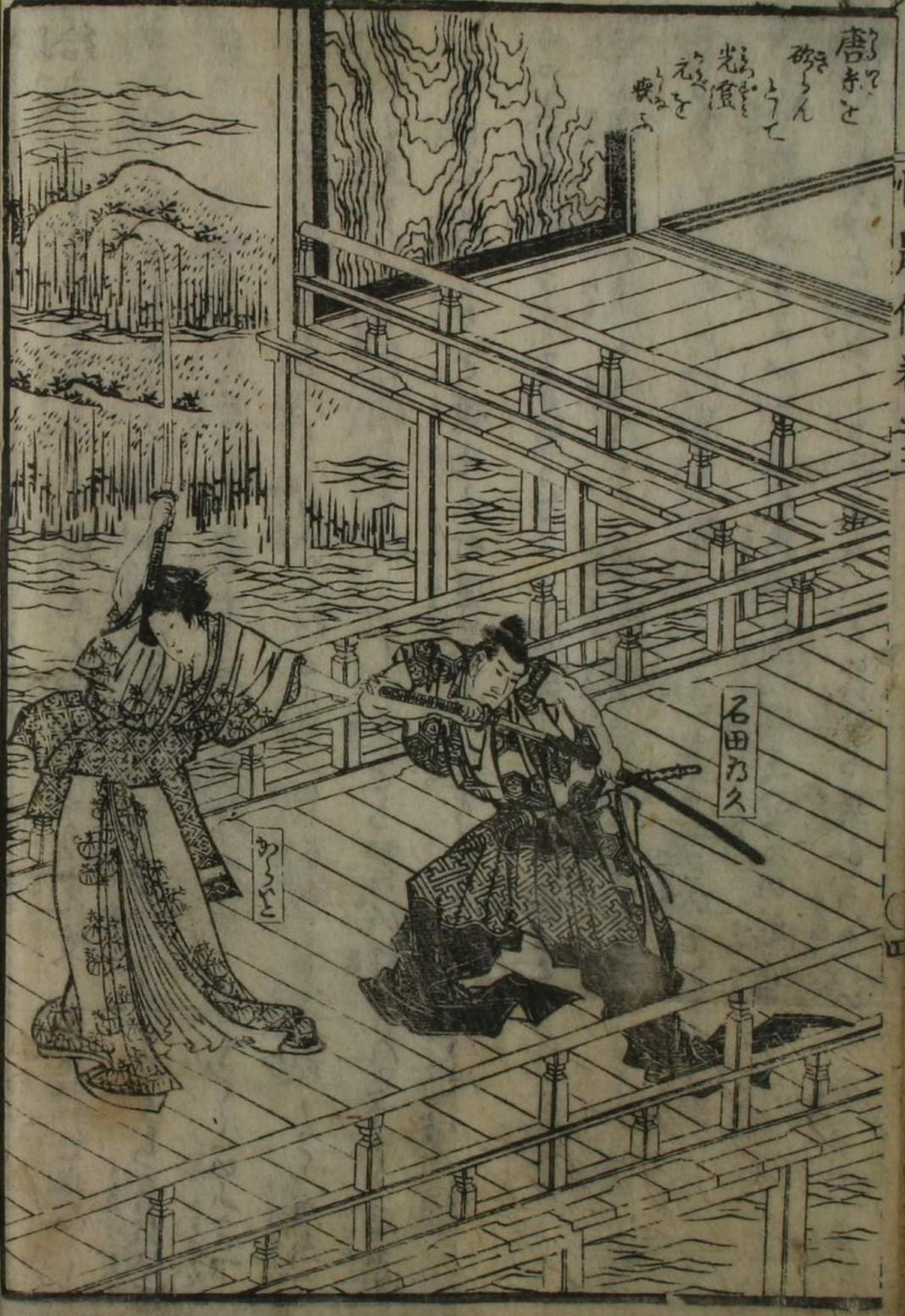
東都曲亭主人著述

石田大島為久の。の。か。身。を。後。中。と。く。ん。か。の。藤。君。殿。の。命。を。捧。ぐ。主。従。  
三騎ニよ。よ。れ。義。高。を。追。蒐。て。討。と。ん。と。ど。り。を。ぐ。る。う。ろ。う。義。高。の。  
入。河。川。の。内。と。り。堀。は。孫。二。光。澄。が。ま。ま。討。れ。ぬ。う。ろ。う。注。を。わ。り。う。ろ。  
為。久。の。後。行。路。う。ろ。う。う。ろ。う。う。ろ。う。宿。外。よ。あ。ん。と。ら。れ。と。俵。の。の。り。の。批。  
赤。路。よ。の。ど。と。り。と。り。と。り。世。は。隠。れ。さ。う。り。け。る。ま。大。娘。侍。け。る。大。は。愁。傷。  
日。夜。寝。食。を。後。く。殆。ぶ。ん。と。う。ぬ。の。程。の。女。房。も。も。慰。め。の。う。ろ。う。と。  
痛。く。は。え。い。が。政。子。御。前。の。珠。う。ろ。う。齒。を。切。て。石。田。を。憎。む。女。房。も。









唐糸と  
 破らん  
 光復  
 元を  
 興ふ

ありまやをれ唐系は降人なりと先世を斬害也。謀叛向すと顕然に  
 家隸の仇逃すととり死なれつ。あり拂く又刺られの唐系もわな飛退  
 刺殺ぬいと久々の今先世を殺すの身のみをさるゆり。さうさなは  
 曉得すと又唐系を殺しぬ。何よりと身の罪を贖はんと。され石と抱く  
 淵に沈む異なりと。ある純子やとうら合咲と大夫と務る勇敢激  
 飽きも廣に胸前より。ありあり懐紙は拭ひぬ。血力のつらなるも  
 あり油彩と奇らな破らん。む面をよる久の刺しけし。刃を割ちと推し  
 つ。間らうも通るゆ。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 捷給。光澄を切害すと。却るがと稱する。その利害もあつる事  
 両端より。脱れんと。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 くの咫尺も其知をすのさうさう。と沈む。強く信向の唐系もさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 の愠怒甚しく。あり一箇のうは深き。薄氷を踏らう。さうさうさう  
 うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 成穴鞠す。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 首をり。自の罪を宥られんと謀りぬ。ありありさうさうさうさう  
 作りとあり。ありあり既と機密をりぬ。ありありさうさうさうさう  
 納る。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 唐系もさうさう。ありありさうさうさうさうさうさうさうさう  
 平か妹。光盛が妻もさう。ありありさうさうさうさうさうさう  
 討す。彼君を討す。ありありさうさうさうさうさうさうさうさう  
 政子。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ありまやをれ唐系は降人なりと先世を斬害也。謀叛向すと顕然に  
 家隸の仇逃すととり死なれつ。あり拂く又刺られの唐系もわな飛退  
 刺殺ぬいと久々の今先世を殺すの身のみをさるゆり。さうさなは  
 曉得すと又唐系を殺しぬ。何よりと身の罪を贖はんと。され石と抱く  
 淵に沈む異なりと。ある純子やとうら合咲と大夫と務る勇敢激  
 飽きも廣に胸前より。ありあり懐紙は拭ひぬ。血力のつらなるも  
 あり油彩と奇らな破らん。む面をよる久の刺しけし。刃を割ちと推し  
 つ。間らうも通るゆ。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 捷給。光澄を切害すと。却るがと稱する。その利害もあつる事  
 両端より。脱れんと。さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 くの咫尺も其知をすのさうさう。と沈む。強く信向の唐系もさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 の愠怒甚しく。あり一箇のうは深き。薄氷を踏らう。さうさうさう  
 うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 成穴鞠す。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 首をり。自の罪を宥られんと謀りぬ。ありありさうさうさうさう  
 作りとあり。ありあり既と機密をりぬ。ありありさうさうさうさう  
 納る。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 唐系もさうさう。ありありさうさうさうさうさうさうさうさう  
 平か妹。光盛が妻もさう。ありありさうさうさうさうさうさう  
 討す。彼君を討す。ありありさうさうさうさうさうさうさうさう  
 政子。ありありさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう













挾霧とる。昔の衣の垢つれ蔽き。うた無き裾海松に似てんが。  
 今も若海の底に沈みき。真如の月の世にぬるべし。美事とらぬ  
 怪異をえん。とくどく。怖る気きりき。歩をそそぎ。つが旅を  
 竊まうしん。田鼠の巢を造らん。鳥うら。とあひつる。あ妖僧が亦る  
 ちくありき。汝はれ鬼う精う。いで妖の皮を剥きんと罵りて。廬  
 かりんととる。怪しう。肢體忽地癱麻。それあめづついで。つ  
 きのとを老僧に。困る眼を睜開たき。美事とらぬ。招き。善哉壯士  
 東まうれ。汝をまうと久し。うらうら。怪しむべう。これとを  
 白河の帝と恨き。憤り世と辞し。三井の長吏頼豪  
 阿闍梨が神異あり。ぞひ出まは。論言けの。とらぬ。と  
 謀り。汝とされ。淨禱の勸賞相違し。宿を果され。

縁故の山門うり。柱とま。然止され。その寛を雪ん  
 る。数万の崩とら。経巻を破損せし。一社の神は祭  
 ら。忘れ。羊を經一の。の。ねる。壽永二年の秋のころ。美神  
 ん。め。入洛の日。が。禿倉と結。願書を寄進し。官位頼朝  
 と。征夷將軍とあり。宇宙の権を執らとめ。神田數十町  
 をあせ。當社は彼覆の社嚴を加へ。と丹波と築ら。と  
 祈請。と。速に納受し。その軍威を助け。戦  
 ぶ。予家の洛を落した。あ。後白河院。敵慮反覆し。  
 美神が軍功。勸賞を乞は。と仰下され。早。と  
 と。將軍の勅許。却頼朝を。を。更。舊怨と惹  
 美神の鬱憤を。が。あり。世の怨。更。舊怨と惹

ぬるり。亦是論廻のふるところ歟。これハ白河の川宇子憤死  
弋仲ハ後白河院と恨り。その由もよ。其が冥あかく弋仲ハ憑り  
る。そのむごまをあらくし。卿相と罵る。つらしめ。院の御所を  
火攻する。上皇はよ。怒る。あひさ。やがて弋仲を征夷將軍  
よ。そのふら。一旦その宿屋と遂る。ふ似れど。武運全ぜん。武運  
終小跋扈也。榮花ハ盧生ガ夢の世や。只一炊の粟津野。朝  
のあつと消ぬる。いと惜とあり。かど。天年の為。さるところ。か  
神カふる。及が。し。ふ。汝。その志。逞く。又の寛と雪んとく。  
諸國と廻歴。一。密よ。舊好の兵士をさ。ら。ふ。大。ある。さ。る。よ。く。  
これ妖氣の神通をあら。く。く。あ。山へ誘引つ。れ。と。汝と宿因  
あ。り。妖。氣。あ。ら。く。今。より。影。の。い。く。ふ。憑。る。さ。が。い。く。あ。ら。く。

奇術を行。り。或ハ敵陣。に。同謀。を用。ひ。或ハ合戦。の。場。に。臨。む。  
進退。に。便。く。せ。ん。と。あ。り。こ。ち。う。く。あ。ら。れ。と。い。ふ。弋。仲。は。これ。を。あ。ら。く。  
大。い。う。ろ。う。び。欣。然。と。て。阿。闍。梨。の。母。と。り。ふ。浮。屠。し。か。又。ま。よ。い。ま。そ  
かりし時。ふ。く。を。願。を。かけ。り。頼。豪。阿。闍。梨。の。神。灵。と。い。ふ。べ。  
肉眼。眩。く。し。く。不。と。く。神。威。を。犯。さん。と。せ。り。阿。闍。梨。殺。す。を。擁  
護。し。て。出。没。自。在。と。り。め。あ。ら。く。虎。よ。翼。を。係。る。か。如。し。直。に。鎌。倉。の  
營。中。に。ま。の。び。入。り。於。於。が。首。を。搦。ぬ。て。孝。養。に。結。ん。ず。瞬。の。ち。は  
あり。と。い。と。勇。し。く。怒。り。於。豪。ら。さ。ひ。さ。や。よ。ま。ま。の。血。ま。の。男。は  
據。べ。う。ら。び。奇。術。と。り。人。を。征。さ。る。と。も。又。津。が。な。れ。の。あ。ら。く。も  
あり。と。猫。間。光。隆。の。弟。新。平。光。實。復。讐。の。志。篤。く。量。る。も。弋  
仲。の。討。死。を。あ。ら。く。大。に。辱。け。失。ひ。更。に。汝。が。在。亦。を。あ。ら。く。見。て。死

尺の向ふあり。これへるは怖ろしく不足し。只彼おれが朝暮坐す。愛敬ふ黄金の猫ハ。律憚ふ。これハ昔天々の圓珍。朝又経をなす。帰朝のとき。船中氣は仁経を嚙破。これこそ。秋の紫磨金をめり。一ツの猫を造り。是を船中よ安並と。件の猫かのづり。其あつて。そのとら。群氣宛と出で。圓珍ハ。彼の金猫。忽ちとく。ゆり。所をあら。ぼ。逢ふ春秋を。坊滅。生の中將。井を堀ら。て。れ。代土中。は。ゆ。い。ふ。ふ。く。秘。其の子光隆。は。持。ふ。光隆院使。う。り。と。た。又。仲。よ。面。叱。せ。れ。家。隸。正。忠。を。擧。と。せ。り。と。あ。及。び。彼。金。の。猫。を。り。と。れ。を。贖。ふ。その。後。又。仲。侍。を。落。る。日。石。田。為。久。彼。猫。を。竊。と。り。と。賴。朝。は。獻。ま。る。困。り。その。猫。今。あ。は。れ。お。れ。の。す。ま。を。あ。と。り。逃。れ。去。り。近。江。に。

今より。後三年を。八月某の日。至る。件の猫。忽地。當中と。出。る。り。あ。り。ん。その。と。を。俵。に。宿。志。と。遂。ぶ。ふ。れ。い。も。秩。父。重。忠。聰。察。し。と。う。人。を。怒。り。努。怪。り。と。ま。る。べ。し。い。が。妖。氣。の。咒。禁。を。授。ん。と。う。秘。文。を。唱。へ。と。三。遍。又。は。頃。よ。を。を。指。む。お。豪。の。強。記。を。稱。贊。し。今。は。と。や。か。や。と。う。が。旭。の。旗。を。と。り。ぬ。さ。せ。ん。と。う。と。う。と。い。そ。が。つ。懐。ま。ひ。ん。と。へ。ま。る。件。の。旗。を。と。り。出。せ。ば。美。さ。る。双。の。み。み。持。受。り。あ。何。後。本。の。吉凶。を。向。ん。と。と。る。ふ。裂。く。る。巖。石。の。の。づ。う。う。震。然。と。う。起。り。お。豪。を。内。よ。包。む。舊。の。の。づ。う。と。あ。る。と。う。と。う。霹。靂。一。声。脚。下。を。發。り。俄。頃。ふ。山。鳴。り。震。動。し。高。峯。の。上。より。暮。直。に。お。び。墮。り。と。か。い。ろ。え。ん。と。楠。柯。の。夢。ハ。覺。よ。り。又。は。假。寐。の。夢。破。



怪異傳卷之三

巖を劈きて  
頼家其を  
頭

うしろ

〇十五

是く。うち仰え。秋の雲初定め。早晩てれて月教も隈あ。
 鳥の海明石も次磨も外あ。日枝の違は。律野の草の菴の蒼。
 もど。夢よ。あり。眼前旭の旗。
 頼豪阿爾梨の。を。
 獲神と。本意。
 の。食。飽。
 奥。
 逐。捕。
 果。
 を。追。

烏猫。猫向の親族。
 毛猫。
 と。
 一。
 伸。
 よ。
 び。
 ら。
 の。
 つ。

年の齡もいと弱く。是れ彼れも務まらば外よ人のありしと云  
 ひたるよ。その優婆塞は物りいづれ。あはせたる旭の霧を掃く  
 懐もさうへれつ。えつうそりみず。梢をぬ棟ら。草を網とく。足の止  
 るる知まら。夜をあらせり。後行者の常まれ。是東の山火よ送らる  
 る。獵夫か門を敲け。八百日かく濱衛をなうら。海士が家よつと  
 う。夕もあれど。難行若狭の後世のたふあり。が。頼とら。ま。あ。可憐  
 夜の月を瞻る。言歌のるんむら。物はくぬりのみ。とも其許を  
 魚作酒の入さく。ま。う。り。世を厭ひし。父のた。母のた。或は結ひ  
 も果ざら。女弟花のま。あ。う。ま。情也。怒ひ。あ。ま。あ。下。  
 さ。あ。は。ま。ほ。う。ゆ。と。必。禮の優婆塞。ま。ま。う。れ。つ。た。め。の  
 山味よ。人とも。ま。ま。ま。ま。定。ま。ま。妻も。ま。ま。父。母。の。た。見。の。た。ま。

花山は皇の流を汲む。大慈大悲の楊柳水。三十餘箇処の吳場を  
 順礼せん。と。ま。ま。あ。れ。ど。ま。は。故。々。の。忘。れ。く。と。い。ま。ま。遠。く。の。ま。ま。  
 ら。ま。又。其。許。の。竹。園。の。人。も。ま。ま。あ。れ。ば。ら。の。身。の。信。濃。路。の。山。里。よ。生。育。て。  
 都。の。ま。ま。あ。り。の。ま。ま。あ。ら。ま。ま。都。鄙。の。物。ま。ま。ま。ま。送。代。よ。ま。ま。  
 湖。吹。よ。あ。ま。ま。撞。の。音。を。山。味。の。行。者。僕。と。ま。ま。あ。ら。ま。ま。の。夜。の。長。ま。  
 あ。れ。ま。ま。あ。ま。ま。今。う。ら。撞。の。ま。ま。あ。れ。ま。ま。あ。れ。ま。ま。あ。れ。ま。ま。あ。れ。ま。ま。  
 驛。と。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。  
 後。の。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。  
 贈。の。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。  
 その。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。あ。ま。ま。



をひかひするも一朝龍衰へて草所猫となり宿う。猫は残めり。それよまされる鼠の徳驚死却猫を食む真如此といれり。引よるを元右へふりと拂ひ除直つ入る音を扱ひり。もよ庭へ内と飛りて打つわれつ追いつて。挑ちて。義高の懐より。うらと落ち旭の旗をあるどの法師拾ひあげ。木曾の白旗といひも果ゆよ。唱る秘文は奇なる。のまをさるれ内はつまの懐よ入る月も秋。行者が芭より抜出と刀の光をのりとも。数万の乳忽然と群て出雲よ。霧も入し雲霧と消る。呆れり引提り。燈籠撲地ととり落す。法師も

二人の面をありつ。の間の高を引あけ。法師の内よ入より。彼山峰の行者誰と猫同。を郎光實より又あり。法師の誰と佐藤憲清入道西行あり。評云石田為久唐糸を殺し。自の罪を脱れんと。俣人の毒計くるり。唐糸とてこれを猪して。先代を殺し。遠よ為久を脱れし。警まよ到る階梯と。臨機を變石田。務まるを速し。又蔭重が引出物を。兄の死を伺り。所謂使。易れ小人の所。将頼豪が驚怒を雲んと。夫己を脩人を征す。徳よあら。法師の浅見いと。天慶の将門政親と七人よ現る。歌将を欺死。大江山の



西行

よしの

猫同と  
舌と  
義高  
状花の  
柳を  
試

猫向光

の賊。船行を千里に放りて。良賤を劫すといへども。一朝その果  
不壞る。及ぶ。尾礫とせよ。砕けり。されば。茂高。管。寝。就。枕  
う。る。父の仇を報んとす。い。可。あり。惜。る。善。を。積。徳。を。免  
る。ち。ぐ。う。天。命。を。俟。と。と。く。く。猫。向。光。實。の。業。順。う。く。却。て  
の。志。金。石。の。ぐ。く。あ。る。う。の。必。也。事。々。の。寓。言。に。係。る。と。い。へ。ども。世。の  
童子。よ。う。く。う。る。と。れ。の。善。を。贊。し。惡。を。退。迷。の。門。を。開。く。こ。と  
あ。べ。し。且。猫。鼠。の。論。に。至。て。ハ。の。ら。ち。ち。一。編。の。大。意。を。明。と。る。の。書  
ら。め。よ。毛。仲。子。の。方。北。國。より。物。を。り。く。楔。子。と。と。毛。仲。子。の。禿  
倉。を。也。鼠。の。禿。倉。を。楔。子。と。と。花。の。禿。倉。人。吏。の。猫。を。也。金。の  
猫。を。楔。子。と。と。金。の。猫。西。行。を。出。り。事。々。物。々。楔。子。あり。楔。子。ハ  
物。を。り。く。物。を。出。る。の。謂。あり。

西行畧傳

西行初の名ハ憲清。後高。藤。原。康。清。が  
次男あり。弓馬の家業に達し。又好し。書。典。を。統。管。絃。を。と。り。以  
て。教。を。う。く。曾。眞。別。の。御。里。を。出。り。京。師。に。到。り。鳥。羽。上。皇。に。仕  
たり。左。兵。衛。尉。に。任。じ。られ。北面の衛士たり。上皇の眷恩。洪。く。く  
と。朝。暮。詠。歌。を。り。く。御。制。に。應。じ。と。り。大。治。二。年。の。十。月。上。皇  
鳥。羽。新。造。の。雜。官。に。幸。し。障。子。の。丹。青。を。題。し。く。御。相。に。言。を  
誦。し。め。し。憲。清。も。の。列。に。列。せ。て。十。首。を。進。る。上。皇。大。に。感。あ  
つ。く。御。叙。を。賜。ひ。中。官。又。御。衣。五。襲。を。賜。ひ。憲。清。纏。頭。し。て  
退。じ。づ。人。と。ら。れ。を。羨。さ。る。の。う。憲。清。素。より。道。世。の。か。あ。り  
遠。巡。り。三。年。を。送。る。と。よ。佐。藤。憲。康。と。い。ふ。の。み。り。心。無。情  
が。氏。族。あり。曾。子。を。携。り。朝。より。退。り。且。交。加。り。睦。と。睦。結。み

小。ある日憲清からの。予が先祖秀御叛夷を征し朝延の藩護  
 たりしよりその後我侪に至る。朝恩稍厚く。人間の厚  
 柴のくく特へ。彼山林の下豈係慕ところありんや。憲  
 康守る感泣し。遂に世を道とんるを相約す。憲清との結  
 鳥羽院に復る。之より憲康が門を拒く。門外より人聚る。家内  
 群を悲しむ。涙を流す。その故を問ふ。家奴が。昨夜主人敵り身  
 死す。その母七十多歳。その妻十九歳あり。之をり。悲歎い  
 深し。との。憲清守る。大に致る。之より哀念を催して。願  
 道を去らんとす。之より致仕せられ。之より許され。己とを待  
 纒を解く。祝髪。名を圓位と改む。時。崇徳院の保延三  
 年。秋八月あり。その後名を改む。西行と稱ふ。年未相従ふ。

人あり。彼又剃髪し。西住と名づく。憲清とのとら妻あり。子  
 あり。之を捨る。枕去る。草舎柴の扉。雨雅をり。生徒  
 を安くせん。一年伊勢古神宮に往く。直に関の東に  
 赴ん。遠に四天龍難に至る。武夫の乗船に便る。船中の人  
 最ま。武夫これを怒る。西行を打。破して血流。血  
 ろん。も。愠。氣。を。西住。は。之。を。見。且。怒。且。哀。西行  
 かの予夢を。以。来。固。前。往。の。乃。乃。を。不  
 虞の禍。は。は。れ。大。あり。あり。も。経。憂。と。す。足。不  
 汝速。故。御。ゆ。べ。との。西住。己。と。を。東。西。相。列。る  
 西行。独。行。し。夜。中。山。を。越。大。井。河。を。渡。り。駿。河。の。岡。部。を  
 控。宇。都。山。を。踰。越。清。見。関。を。過。富士。山。を。眺。

足柄に至り。相模路より。鳴五澤の詠あり。裳を武藏所の家小  
拂つて。髪を白河の月より傾け。美島より實方の墳をたづね。松  
野の爲を吟。奥羽兩國の長。藤原秀衡を訪ふ。又洛より  
秀衡の西行が親族あり。若くは苗ととも。西行遂に苗らむとの  
至るとらる。さきんね。和歌を詠。ト。それを過時の人稱。噴く。リ  
に順とん。びて美濃路に到り。あつて。美濃路に入り。又杖を四  
圍に搦ん。と。幣を加茂の神社より。洛をゆるぎを告ぐ。  
時。仁安二年の十月。四天王寺に赴け。洛より。口の里をこ。と。  
宿を。和女小求る。と。絆さ。即。奇を詠。と。過つて。瀨波の松  
山に到り。崇徳院の御廟より。玉の床の楓詠あり。それを。吳  
墳より。向。と。と。と。菴を。同。國。善。導。寺。の。側。に。締。い。且。く

い。と。苗。を。西。行。出。家。の。後。の。妻。難。深。く。居。と。あり。その。女。四。人。と  
ある。への。あ。は。附。死。く。あ。つ。び。を。願。ど。年。を。終。く。西。行。長。官。小  
治。月。ひ。と。りの。尼。の。詠。経。を。を。す。と。す。り。和。奇。を。詠。く。と。を  
結。ら。尼。又。られ。を。す。と。走。り。あ。つ。られ。を。入。と。か。舊。の。妻。あり。今  
行。処。より。あり。や。と。同。が。高。野。山。の。麓。に。住。む。り。と。答。へ。互。に。別。後。の  
情。を。述。く。別。ま。ね。と。の。後。西。行。偶。女。見。の。所。在。を。と。か。の。人。の。深。心  
く。られ。を。吟。か。女。見。父。の。末。と。り。と。す。と。且。喜。ぶ。且。泣。く。と。す。と。  
これ。より。西。行。世。を。遺。り。時。の。女。見。僅。く。四。歳。と。よ。至。り。と。説。く。  
成長。と。西。行。の。恙。な。れ。を。入。と。喜。ん。と。られ。と。告。ぐ。り。と。の。女  
見。と。高。野。山。の。翠。微。より。寧。若。樂。を。化。人。と。共。み。り。と。ん  
り。ゆ。れ。と。慈。母。と。従。へ。と。り。の。女。見。の。音。を。稟。く。遂。に。彼。れ。を

西行三人像

人生宇宙間志願當似水不行萬里  
 若即讀萬卷書



若くは中ね清小のまじり  
 一の教をトやおれんせしむ

去る。西へ。又住く。孝親最厚し。かく治承二年の九月西行  
 ひとり。の伴侶とも。西國へ赴く。日。又。江。口。を。さ。り。て。途。に。驟。雨。下  
 り。路。傍。の。菴。小。い。り。の。尼。あ。り。て。雨。の。偏。に。慌。忙。を。さ。え。り。贈  
 答。の。寄。り。や。り。安。藝。の。巖。嶋。に。詣。て。家。を。い。ひ。紫。上。す。め。宇。佐。八  
 幡。宮。を。拜。し。潼。御。崎。に。到。て。更。に。撰。別。を。吟。り。昆。陽。野。を。掠  
 南。都。に。到。り。春。日。社。に。宿。三。五。山。を。瞻。り。東。大。寺。小。松。に。俊。惠。法。師  
 と。和。牙。を。終。じ。後。又。高。野。山。の。麓。に。到。り。居。り。と。致。十。日。ゆ。く。い  
 撰。別。に。赴。け。り。撰。集。坂。九。卷。を。撰。じ。時。に。壽。永。二。年。の。春。善。達。寺  
 赤。の。圓。坐。に。あり。文。治。二。年。の。秋。眞。別。に。赴。け。り。秀。衡。を。訪。ん。と。ん  
 中。途。鎌。倉。に。托。け。り。秀。が。岡。に。訪。じ。し。り。是。より。以。下。へ。の。草。紙  
 の。第。四。卷。に。つ。え。し。り。

西行傳卷之三

魁藩子云東鑑撰集鈔西行物語山家集未を拵かよ西行  
栗津野に住りてハハスえびらんの是野史の寓言なりと作  
者第七套に至る。後西行の二子を説きしはもと彼原の  
みり人又竹よふらふとよめりといふをりりしよりき  
その畧傳を述ぶ終始を審よせり。

五師養父翁嘗りての世人二月十五日を西行忌とん。の説  
類らくの非あらん拵かよ草菴和歌集類題の部。

西行上人の跡の雙林寺に住けりしを二月十六日人々来り  
佛更行に歌詠しむとありし也。

昔とて又あのはる終つてふ二月の暮のありけり 頭河  
西行の建久九年二月十六日入寂せられたるを後人その二月

の正月のころといふ牙よりと十五日ととるるや。件のまの辞せよあり  
必又を月のころといふ決定十五日といふありあつるべし。十四日より十六日迄  
をその月のころといふん故といふ。抑西行上人の生塵情標れり又詠  
の絶妙ある玉とつらねどといふと。俗を保延三年に離世を建久  
九年よりす。まゝ六十二年の際一巾一衣一杖一鞋。東西南北一思の至  
らざる腰もあく。前後意を同じと。實に蓋世の一畸人前敵あり  
後を對する。うゑあつる。數百年の今日至る。青口の童もよくられを  
あ。その詠あよ至る。故奉よ違あ。予寡聞を羞らる。慢は毫  
を深篇後よ敷行伝記ととを許さる。寔に附驥の面目あり。



